

Kiang Malingue Inside Out/Outside in

馬凌畫廊
kiangmalingue.com

10 Sik On Street, Wanchai, Hong Kong
50 Eldridge St., New York, NY 10002

(アーティスト) キャリー・ヤマオカ

(オープニングレセプション)
2025年11月12日 (水)
15:00~17:00

(会期)
2025年11月12日 - 12月3日

(開館時間)
毎日9:00~17:00
最終受付: 16:30

(会場)
曼殊院, 日本京都市左京区一乗寺竹ノ内町42

(入場料/曼殊院拝観料)
一般 800円
高校生 500円
小中学生 400円

(お問い合わせ)
office@kiangmalingue.com;
+852 2810 0317

(プレスお問い合わせ)
賀依雲 Yiyun He
yiyun@kiangmalingue.com;
+852 2810 0317

(その他のお問い合わせ)
廖薇 Ella Liao
ella@kiangmalingue.com;
+852 2810 0318

Kiang Malingue (馬凌画廊) は、京都の曼殊院でキャリー・ヤマオカによる個展「Inside Out/Outside In」を開催します。会期は2025年11月12日~12月3日、開館時間は午前9時~午後5時です。過去25年にわたる作品を網羅する本展は、ヤマオカにとって日本初の個展であり、2025年のマリア・ラスニック賞の受賞に続く重要な節目となる展覧会です。

「キャリー・ヤマオカの作品と向き合うとき、取り返しのつかない親密さの可能性を受け入れてほしい。

距離を味わいながら、自らの位置を保つこと。その軌道を描くような運動が、やがてあなたを未来の近接へと導くかもしれない。

いま自分がどのような身体的・精神的・霊的状态にあるのかを意識してほしい。それが視覚的認識と知覚の始まりとなる。

出会いの中で『時間の徳』というものを考えてみてほしい。物理学において変位には大きさと方向がある。角を曲がって元の場所に戻れば、変位はゼロになる。ヤマオカの作品は、この孤独な“ゼロサムのゲーム”から力を取り戻すかのように働く。どうか、そのブロックを歩いてみてほしい。

心の振幅が、作品が提示する『自己の建築』を形づくることを予期してほしい。

そして、作品を記憶の中で揺らぎ続けさせてほしい。あなたが離れている間にも、それは変化を続け、あなたが社会的意識や愛を通して生を変容させるように、作品もまた変化し続ける。

必要なときには、それを『予備燃料』として呼び戻してほしい。目を閉じて焼きつけ、再び必要なときに取り出すのだ¹。」

キャリー・ヤマオカ (1957年アメリカ・グレンコーヴ生まれ、ニューヨーク在住) は、絵画、ドローイング、写真、彫刻といった複数のメディアを横断して活動する学際的なアーティストです。彼女の関心は、表面のトポロジー (地形的構造)、物質性とプロセス、かすかに視認できる触覚性、そして作品の結果を左右する意図的および偶発的な出来事の連鎖に向けられています。ヤマオカの作品は、化学反応の記録と、変化の過程で一瞬現れては消えるイメージをとらえようとする欲望が交差する地点で、鑑賞者に働きかけます。

彼女は、偶然性を積極的に受け入れながら、即興/意図、方法論/直感、表層/深層といった二項対立を溶解させる素材探求とルール逸脱の戦略を用います。可視/不可視、可読/不可読のあいだを往還し、分解と再構成を繰り返す彼女の作品は、常に変異の状態にあります。

1990年代半ば以降、ヤマオカは知覚そのものの本質に直接的に向き合い、身体的・社会的・政治的な存在の不安定さを内包する「主観の開かれたフィールド」を探求してきました。鏡面、反射性マイラーフィルム、樹脂といった限定され

た素材語彙を用い、流し込みや傷つけのプロセスによって生まれる表面は、周囲の環境を吸収し、反射し、歪めるような錬金術的な構成を形づくっています。

近年では、「時間の物質性」に対する探求をさらに深め、スタジオに眠る完成・未完成の作品を再訪し、支持体を解体して再構成する試みを行っています。古い要素と新しい要素、異なる時代のプロセスを剥がし合わせ、織り交ぜることで、作品に再生の力を与えます。そうして生まれた成果は「redux（再構成）」や「revisited（再訪）」と名付けられ、過去の痕跡をとどめながら現在と結びついていきます。

ヤマオカは、光・空気・天候といった周囲の要素を含む建築的環境のなかで、鑑賞者との身体的な出会いを作品の完成要素として重視しつつ、作品が常に可変的であることを主張しています。

本展「Inside Out / Outside In」では、ヤマオカの多様な方法論と形式的実験が響き合います。反復、消去、堆積といったプロセスを通して物質の論理を解体し、作品の表裏両面を扱い、接着、剥離、反転といった操作を数年の時間を隔てて行うことで、新たな作品を生成しています。

曼殊院という「内と外」が交差する空間に呼応し、ヤマオカは「内を見る／外を見る」「遠くから／近くで」といった視点の転換を用いて鑑賞者を導きます。作品の一部は外気にさらされ、日中の光と影の変化を受け止め、風や空気の流れのなかで周囲を映し込み、鑑賞者の内的リズムと知覚を共鳴させます。

本展は、ヤマオカが十代を過ごした日本における初の個展であり、「リバーズ・ディアスポラ（逆方向の移動）」とも呼べるこの帰還は、物質が二項性——過去と現在／こことそこ／外と内——のあいだに刻む痕跡を通して、絶え間なく変容する存在のあり方を響かせています。

[1] Jo-ey Tang 「Epochs become infinite」 『RE: Carrie Yamaoka』 (Santa Fe: Radius Books, 2025年)、11頁。

（キャリア・ヤマオカ 略歴）

キャリア・ヤマオカの作品は、ICAフィラデルフィア、MoMA PS1（ニューヨーク）、パレ・ド・トーキョー（パリ）、ポンピドゥー・センター（パリ）、ペルノ・リカール財団（パリ）、ヘンリー・アート・ギャラリー（ワシントン大学／シアトル）、アーティスツ・スペース（ニューヨーク）、ウェクスナー芸術センター（オハイオ州コロンバス）、パーティシパント Inc.（ニューヨーク）、ヴィクトリア&アルバート博物館（ロンドン）、グレイ美術館（ニューヨーク）、マスMOCA（マサチューセッツ州ノースアダムズ）、ジルカ・ギャラリー（ウェズリアン大学／コネチカット州ミドルタウン）など、世界各地の主要美術館で展示されてきた。

彼女の作品は、バッファローAKG美術館、シカゴ美術館、ポンピドゥー・センター、ダラス美術館、ヘンリー・アート・ギャラリー、サンプライド財団、ホイットニー美術館などのパブリックコレクションに収蔵されている。

2025年マリア・ラスニック賞、2019年ジョン・サイモン・グッゲンハイム・フェローシップ、2017年「Anonymous Was A Woman」賞の受賞者でもあり、クィア・アート・コレクティヴ「fierce pussy」の創設メンバーとしても知られている。現在、ニューヨークを拠点に活動している。